

令和元年6月17日現在

機関番号：32678

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04494

研究課題名(和文)遊びの援助者(教師)に求められる<身体知>獲得に関する研究

研究課題名(英文)A Research on How to Acquire Embodied Knowledge Required to Teacher to Support Children's Play

研究代表者

岩田 遵子(Iwata, Junko)

東京都市大学・人間科学部・教授

研究者番号：80269521

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：遊び中心の保育は、幼児の主体性を育てるとして制度的にも推奨されているが、保育者が学級の幼児集団を見取る方法論を持ち得ないため、成功しているとは言い難い。それに対して小川博久の「遊び保育論」は、クラスの子どもたち全員の遊びを見取り援助する方法論を提案している。遊び保育論に習熟したベテラン保育者は、その展開に必要な「身体知」を獲得しており、それによって室内で展開する各遊びの成り行きを的確に把握し、子ども一人一人についても把握しているが、新人保育者の場合はそうではない。この研究では、新人保育者が遊び保育論の実践において出会う困難とその原因を理論的実証的に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

幼稚園教育要領では幼児一人一人を理解し、その特性に応じた援助をすることが求められているが、1クラス20～30人の子どもたち全員に担任教師(保育者)1人が責任を持たねばならないという制度的現実はいまだ考えられてこなかったため、観念論に終わっている。それに対して、小川博久の「遊び保育論」は、クラス全ての幼児一人一人についての理解と援助についての方法論を提起しており、一定の成果を挙げている。そのため、この論に習熟するための理論的、実証的研究は、幼児教育関係者が制度的現実の自覚化を促し、クラスの全ての子どもたちの遊びを充実したものにするための教師(保育者)養成に有意義である。

研究成果の概要(英文)：Although play-centered early childhood education is institutionally recommended in Japan, it can not be said that it is successful for lack of a theory on teacher's way of grasping of all children in her class, who are playing at each place in the kindergarten or childcare center. On the other hand 'Asobi Hoiku-ron' (Theory of Play-Centered Childhood Education) by Hirohisa Ogawa presents the way for a teacher of how to provide materials and construct their environment and support their activities to let them maintain it in order to grasp all of her children. A teacher skilled at this theory, who has acquired the embodied knowledge for expanding the theory, can understand the process of each play of all the groups of her class, their difficulties in them to understand each child, whereas an inexperienced teacher cannot. This study clarify theoretically and empirically difficulties and its cause of an inexperienced teacher's practice.

研究分野：保育学

キーワード：遊び保育 遊び集団 保育者 援助 俯瞰 幼児理解

様式 C-19、F-19-1、Z-19、CK-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

(1) 遊びを中心とする保育は、幼稚園教育要領や保育指針において幼児の主体性を育てる保育として推奨されているが、成功しているとは言い難い。というのは、施設では幼児集団（25人～30人）を保育するにも関わらず、教師（保育者。以下同様）は幼児に対して個別的関与を行う傾向が強く、幼児の多くは放任状態に置かれ、結果的にクラスが荒廃することが少なくないからである。

(2) それに対して、小川博久の「遊び保育論」は集団を見取り援助する方法論を提起している。小川は、教師がクラス全員の遊びを見取り、適切な援助を行うためには、幼児達が一定の場所で一定のメンバーとモノを共有しつつ、遊びを一定の時間持続的に展開することが必要であり、そのためには「戦略」（方法論）が必要だと主張する（『保育援助論』生活ジャーナル社、2000、『遊び保育論』萌文書林、2010、以下「遊び保育論」で統一）。

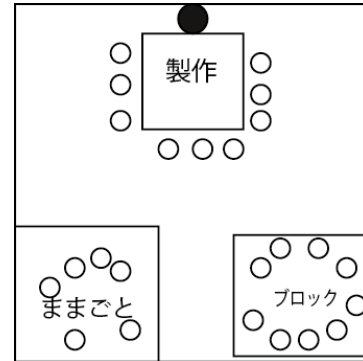
その「戦略」の概要は、a)～d)にまとめられる。

a) 保育室内に異なった活動のできるコーナー（製作、ままごと、ブロック等）を、相互に「見る一見られる」関係に設置する（右図）。

b) 教師（図の●）は製作コーナーの中心に壁を背にして座り（各コーナーの遊びの状況を見ることが可能な位置であり、幼児達（図の○）は教師から見守られているという庇護感を得ることができる）、「作る」パフォーマンスを行う。それが幼児達のモデルになり、幼児達の製作活動を誘発し、製作コーナーの遊びが安定すると同時に、他のコーナーも幼児達が群れ始め、各コーナーの遊びが展開する。

c) 教師はモデルを演じつつ、各コーナーの遊びに視線を送りながら、室内全体の状況を把握し、各遊びの状態を診断（幼児達のみで遊びを展開していけそうか、教師の援助が必要かについて）する。

d) 援助が必要と判断される場合、教師は製作コーナーの遊びの安定を見届けた上で製作コーナーを抜け、その遊びの援助に入り、その遊びが幼児達で維持できそうになったら製作コーナーに戻る、というものである。



(3) 研究代表者は「遊び保育論」をいくつかの園で指導し、一定の成果を得てきた（小川・中山・岩田 2011）が、教師にとってこの実践はそれほど容易ではなく、特に上述のc)（教師がモデルを演じながら、保育室全体の遊びを見取る）の実践が難しい。

それは次の要因によることを経験的仮説として得ている。

イ) 教師は個別的関与の傾向が強いため、集団を俯瞰するまなざしを持ちにくい。特に新人教師はこの傾向が顕著であることが多い。

ロ) イ)が続くと、放任状態に置かれる幼児が多くなり、統制が必要な一斉活動においても無秩序でクラスの凝集性が低くなる。すると、教師は言語的統制を行ってしまいがちになり、集団を捉えることは一層困難となる。

ハ) モデルを演じることと周囲を見取るとは、特殊な<身体知>であり自然体では行えない。

(4) 申請者は、この困難を乗り越え、「演じながら全体を見取るという<身体知>」（以下<身体知>）を獲得するためには小川の方法論に新たな方法論を付加する必要があると考える。それは、手遊びやわらべうたを一斉活動として多く行うことが有効であるという理論仮説を立てている。それは以下の通りである。

① 手遊びは、実践しつつ俯瞰するまなざしを構造化しており、集会場面はモデルを演じつつ幼児達の状況を見取ることが自由遊び場面よりも容易であるので、集会場面での手遊びの実践は演じながら幼児達全体を見取る（<身体知>獲得）練習の場となりうる（岩田・小川 2015）。

② 手遊びやわらべうた等によって、教師と幼児達の間でリズム共有が蓄積されれば、教師の行動を幼児達が模倣する可能性が高くなり、結果的に遊びにおける教師のモデル性も高まる可能性が高い。また、幼児同士の同調性も高まることになり、幼児達が自発的に群れを形成するようになり、遊びから逸脱する幼児も減少する（岩田 2008、2010）。その結果、教師は室内の遊び全体を見取りやすくなり、<身体知>が習得されやすいはずである（岩田・小川 2015）。なお、このことを数園において実践しており、実証される可能性が高いと予測している。

③ それゆえ、<身体知>習得の困難は、次のような段階を踏むことによって軽減されるはずである。i) 一斉活動で手遊びやわらべうた等のリズム共有を喚起する活動を多く実践し、クラス全体のリズム共有度を高めると同時に、「演じながら全体を見取る」ことを練習する。ii) i)によってクラス同調性が高められ、「演じながら見取る」ことに習熟したら、その<身体知>を遊び場面で応用する（「作る」モデルを演じながら、室内全体の遊びを俯瞰する）。こうして<身体知>が習得され、「遊び保育論」に習熟することが可能となると思

われる（岩田・小川 2015）。

2. 研究の目的

以上の新たな方法論と仮説は理論仮説であり、経験的・予備的知見の域を出ていないため、理論仮説をより補強する共に、アクションリサーチによる実証的な研究が必要である。それゆえ本研究では就学前施設におけるアクションリサーチによって、＜身体知＞獲得の困難さを軽減し、より容易に習得するための「方略」を構想するために、＜身体知＞獲得の難しさの実態を解明し、獲得のための「方略」を下記のように構想することを目的とする。

教師の＜身体知＞獲得と「遊び保育論」実践の習熟過程を下記のように明らかにする。

- ① 多くの新人教師の陥りやすい傾向（個別的関与、言語的統制、集団を見取れない）とそのためクラスの秩序が維持されなくなる傾向が強まる実態を実証的に明らかにする。
- ① 「遊び保育論」の実践における教師の躓きの実態を明らかにする。
- ② 手遊びやわらべうた等によるリズム共有の蓄積によってクラス集団の凝集性が高まることによって、一斉活動場面における教師のまなざし（視線の動き）がどのように修正されるか（自分の近くの幼児や個しか見られない状態からクラス全体を俯瞰できるようになると予測される；上記仮説）を明らかにする。
- ③ ③によって俯瞰するまなざし（＜身体知＞）の獲得におけるリズム共有を喚起する活動の実践が有意義であることを明らかにする。
- ④ 一斉活動における＜身体知＞を獲得すると遊びにおいても＜身体知＞を習得していくと予想されるので、その過程を実証的に明らかにする。
- ⑤ 遊び場面における＜身体知＞を教師が獲得するにつれて、幼児の遊びが一定の場所、一定の仲間とモノによって一定の時間持続するようになると予測されるので、その過程を明らかにする。

(2)(1)をもとに、「遊び保育」の実践によく習熟するための教師教育のためのプログラムを作成する（ビデオ教材作成等）。

3. 研究の方法

「遊び保育論」を実践している園（研究協力園）のアクションリサーチを次のように行う。

(1)「遊び保育論」を実践している就学前施設において新人教師（保育者。以下同様）が陥りがちな傾向（個別的関与、集団を見取れない、言語的統制を行う等）の実態を明らかにする。

(2)上記の新人教師を中心に仮説的「方略」（手遊びやわらべうた等を一斉活動で多く実践する）によるアクションリサーチを行い、＜身体知＞習得の過程を明らかにすると共に「方略」の有効性を実証的に検討する。

(3)アクションリサーチの具体的な手続き

- ① 各園において新人教師（経験が浅く遊びの持続性とクラスの安定性が低い）と中堅教師（経験およそ5年以上であり、幼児の遊びの持続性が高くクラスが安定している）を選定する。
- ② 各教師のクラスの室内の遊び状況（1角に固定広角レンズ付ビデオカメラ設置）と教師の言動（移動カメラ、ワイヤレスマイク）、視線の配りと見え方（ウェアラブルカメラ）を記録する。
- ③ 保育終了後に動画記録を見せながらその日の遊びの見取りと診断についてインタビューを行う。
- ④ 仮説的「方略」を取り入れた「遊び保育論」を実践し、上記②と③の記録をもとにビデオカンファレンスを行う。小川（「遊び保育論」考案者）は研究協力者として時々参加する。
- ⑤ 仮説通りにクラスの凝集性が高くなった場合には、そのことを教師と確認し、一斉活動場面の見取り方と遊びの見取り方と援助の仕方を助言・指導する。
- ⑥ ④と⑤の繰り返しの過程で、教師の一斉活動場面と遊びにおける幼児の状況の見取り方と援助の仕方に、変化が見られると思われるのでその過程を記録する。④仮説通りにいかず、クラスの凝集性が低いままであり、遊びも持続しない場合には、映像記録をもとにその要因を探り、仮説と「方略」を構成し直し、新たな「方略」を構想する。

(4)分析視点

- ① 新人教師と中堅教師の保育行為を、ア)室内の遊びの状況、イ)身体の構え、ウ)視線の配り、エ)表情、オ)発話行為の点から比較検討し、新人教師の保育行為の傾向を明らかにする。
- ② 仮説に基づく「方略」の実践によって、一斉活動場面における幼児の凝集性が高まってくると予測される。その過程における新人教師のパフォーマンスを、身体の構え、視線の配り、表情、発話行為の点から検討する（構え、視線の配り等が個別の幼児に対するものから幼児全体を俯瞰することが可能になると予測される）。
- ③ 「方略」が実践され、一斉活動における幼児の凝集性が高まると、遊び場面における遊び

の持続性、凝集性も高まると予測されるので、その過程での遊び場面における新人教師の保育行為を、ア)室内の遊びの状況、イ)身体の構え、ウ)視線の配り、エ)表情、オ)発話行為の点から検討し、新人教師が「遊び保育論」の実践に習熟していく過程を映像記録から分析する(分析ソフトStudioCodeを用いる)。

4. 研究成果

(1)遊び保育論に習熟しているベテラン教師(保育者)の<身体知>の内実を明らかにするため、インタビューを行った結果、ベテラン教師について次のことが明らかになった。

- ① 製作コーナーに座って作るパフォーマンスを行いながら、室内で展開される複数(4~5)の遊びの成り行きと同時に並行的な読み取りを的確に行なっている。
- ② 遊びそれぞれの読み取りだけでなく、室内で展開される遊び全体を俯瞰し、遊び相互の関係性を読み取っている。
- ③ 遊んでいる子どもたちと教師が「見る―見られる」関係にあることを自覚している。

(2)ベテラン教師と新人教師の読み取りをインタビューによって比較した結果、ベテラン教師の(1)のような「見え」を可能にしているのは次のことであることが明らかとなった。

- ① ベテラン教師は、製作コーナーから他のコーナーの遊びを見る時間が非常に長い(新人教師は短い)。
- ② ベテラン教師の実践においては、幼児の遊びが教師から自立的である(新人教師は依存的)。
- ③ また、この実態は、このクラスの保育実践が手遊びやわらべうた遊びを頻繁に行うことによって可能となっていると考えられる。

(3)また、ベテラン教師と新人教師の保育状況の変化過程の分析(幼児の遊びの群れの変化の分析)から、ベテラン教師の俯瞰的なまなざしと、それによる的確な(読み取り)は、幼児が室内で展開する各遊びのメンバーと場所が安定しており、そのメンバー同士の凝集性が高いことによって可能となっていることが、明らかになった。幼児の遊び集団の凝集性が高いと遊びのゲシュタルト性が高くなり(図1)、教師が見取りやすくなるからである。新人教師が的確に読み取れないのは、幼児の遊び集団の凝集性が低く、ゲシュタルト性が低い(図2)、クラスの幼児の状況を読み取りにくいからだと考えられる。

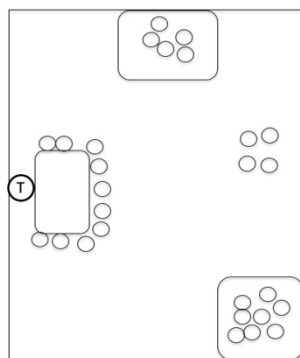


図1 ゲシュタルト性高い

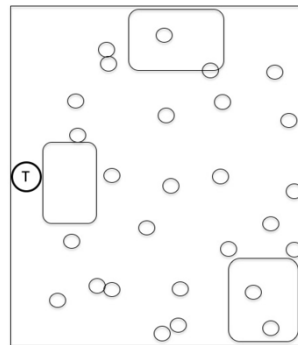


図2 ゲシュタルト性低い

(4)このように幼児の遊び集団がゲシュタルト性が高い状態で維持される場合、「演じながら全体を見取るという<身体知>」は、困難性を持つものではなくなる。教師はモデルを演じることから解放される(モデルを演じなくても、幼児たちが主体的に遊ぶ状態が維持される)からである。

(5)新人教師の保育実践において幼児たちが室内で展開する各遊びのメンバーと場所が安定しないのは、教師に個別的言語的関与傾向が強いことが関係している。個別的・言語的関与傾向が強いと、幼児が教師の周囲に集まってしまう、教師は製作コーナーで作るパフォーマンスを維持できない。そのことによって教師のモデル性が低くなり、製作コーナーにいる子どもたちが作る遊びを維持できない。言い換えれば、教師が作るノリを生成できなければ、子どもたちが作るノリの共同生成を維持することができず、それによって動き回ることになり、結果的に他のコーナーの遊びも安定しない。

(6)このように新人教師の個別的、言語的関与傾向が強いのは、第一に、国の示す設置基準は、教師1人が集団を見取ることを前提としているにも関わらず、内容基準は幼児一人ひとりを見取ることを求めているという矛盾があること、第二に、それによって教師養成校で使用される教科書が子ども一人ひとりを見取り、関与することの重要性を謳っていること、にあると考えられることが、教師養成テキスト分析によって明らかになった。

(7)新人教師の場合、<見え>を成立させるための条件が満たされ、幼児の遊びが教師から比較的自立的に展開され、遊びのゲシュタルト性が高くなることによって、各遊びのなりゆきを詳細に見取ることができるようになったとしても、必ずしも遊びに対する適切な援助ができるわけではない。教師が幼児の遊びに対する共感性が低い場合、遊びの外側から言語的に関与してしまい、結果的に遊びのノリを活性化することには繋がらなかった。「遊び保育」実践に求められる<身体知>獲得のためには、いくつか課題があるということである。

<引用文献>

- ① 小川博久・中山昌樹・岩田遵子他、遊び保育の実践、ななみ書房、2011
- ② 岩田遵子、学級全体が意欲的に取り組む合奏はいかにして可能か—ノリによるコミュニケーションを通して—、日本音楽教育学会第2学会誌音楽教育実践ジャーナル、Vol.6-1 2008、59—70
- ③ 岩田遵子、現代における乳幼児の生活の危機に大人はどう対処すべきか—子どもの生み出す文化を育むために、教育方法 39 卷（日本教育方法学会編）、2010、82—97
- ④ 岩田遵子・小川博久、近代教育制度における教職実践の一方方向性克服の試み—『遊び保育』における手遊び実践の意義—、東京都市大学人間科学部紀要第6号、2015、11—33

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計3件)

- ① 岩田遵子、「保育文化」としての手遊びの多様性(2)—身体によって形象化された絵描き歌、東京都市大学人間科学部紀要第10号、査読無、2019、9—18
- ② 岩田遵子、「保育文化」としての手遊びの多様性—言葉遊びの身体的形象化、東京都市大学人間科学部紀要第9号、査読無、2018、1—10
- ③ 岩田遵子、保育実践における手遊びの意義—「保育文化」としての手遊びの重要性—、東京都市大学人間科学部紀要第8号、査読無、2017、23—36

[学会発表] (計17件)

- ① 小川博久、岩田遵子、中山昌樹、中田幸子、保育者が幼児達と関わる集団実践理論の必要性(1)—「個の幼児理解」を前提とする現行の保育理論を問う—、日本保育者養成教育学会第3回大会、2019
- ② 岩田遵子、小川博久、中山昌樹、中田幸子、保育者が幼児達と関わる集団実践理論の必要性(2)—個別的・言語的関与傾向の強い保育実践例の検討を通して—、日本保育者養成教育学会第3回大会、2019
- ③ 吉田龍宏、山田祥子、岩田遵子、小川博久、伊藤早穂、クラスにおける子どもの主体性はいかに確立されるか③—4歳児後半期にみられる保育者から子どもへの役割移譲の過程—、日本保育者養成教育学会第3回大会、2019
- ④ 岩田遵子、一斉活動における「子ども文化」の創成—わらべうた遊びの活動を通して—、日本保育学会第71回大会、2018
- ⑤ 岩田遵子、小川博久、中山昌樹、中田幸子、保育者の「見え」の内容理解と援助の方向における問題点(1)—新人保育者の実践映像記録の分析から—、日本保育者養成教育学会第2回大会、2018
- ⑥ 中田幸子、岩田遵子、小川博久、中山昌樹、保育者の「見え」の内容理解と援助の方向における問題点(2)—新人保育者のインタビュー分析から—、日本保育者養成教育学会第2回大会、2018
- ⑦ 吉田龍宏、山田祥子、岩田遵子、小川博久、伊藤早穂、クラスにおける子どもの主体性はいかに確立されるか①—クラス集団における応答的同調としての当番活動—、日本保育者養成教育学会第2回大会、2018
- ⑧ 岩田遵子、小川博久、「個の幼児理解」を前提とする現行の保育理論を問う—クラス集団の遊びを保育する実践者の立ち位置から—、日本教育方法学会第53回大会、2017
- ⑨ 岩田遵子、「保育文化」としての手遊びの多様性(2)—身体による形象化としての絵描き歌—、日本保育学会第70回大会、2017
- ⑩ 小川博久、岩田遵子、中山昌樹、中田幸子、保育者の身体知獲得におけるウェアラブルカメラの可能性(1)—ウェアラブルカメラ装着の理論的根拠—、日本保育者養成教育学会第1回大会、2017
- ⑪ 岩田遵子、小川博久、中山昌樹、中田幸子、保育者の「身体知」獲得におけるウェアラブルカメラの可能性(2)—保育者の「見え」の成立を可能にする条件—、日本保育者養成教育学会第1回大会、2017
- ⑫ 岩田遵子、小川博久、保育施設に於ける遊び集団の凝集性は如何にして生成するか—『遊び保育論』の批判的検討—、日本教育方法学会第52回大会、2016
- ⑬ 岩田遵子、「保育文化」としての手遊びの多様性—言葉遊びの身体的形象化—、日本保育学会第69回大会、2016

〔図書〕（計1件）

- ① 小川博久、岩田遵子、本庄富美子、授業実践の限界を超えて—ある教師の表現者としての教育実践—、ななみ書房、2018、30-43、55-88、105-134、136-158、172-191、212-236

6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：小川博久

ローマ字氏名：Hirohisa Ogawa

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。